

上野遺跡採集の石器について  
－石器の観察と解釈 採集品を通して－

面 将 道

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 上野遺跡採集の石器について

－石器の観察と解釈 採集品を通して－

面 将 道

## 1. はじめに

近年、京都府下において京丹後市上野遺跡や福知山市稚児野遺跡など、後期旧石器時代に属する遺跡が相次いで発見されている。現在までの「京都に旧石器遺跡なし」という認識で、発掘調査に携わることは、遺跡の記録保存という目的を十分に達成できない可能性がある。そのため、石器

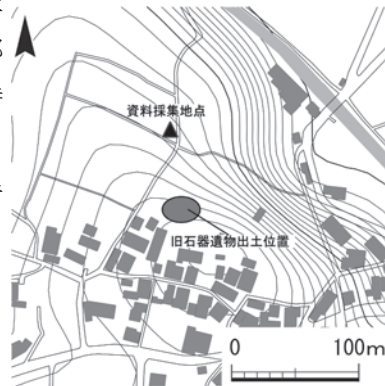


第1図 上野遺跡の位置  
(国土地理院DEMより作成)

についての基礎的な観察法を、京丹後市上野遺跡で筆者が採集した石器の観察を通して紹介し、今後の京都府下における発掘調査の進展に寄与出来れば幸いである。

## 2. 上野遺跡の概要

京丹後上野遺跡は、日本海に面する標高約27mの海岸段丘上に位置する遺跡である。これまでに3回の発掘調査が行われており、主に段丘面南西～南東にかけて遺跡が展開している。南西部では、縄文時代から平安時代に属する遺物、古墳時代の土坑などが検出されている。一方、南東部では、ごく限られた点数ではあるが、後期旧石器時代前半期の石器が小規模な集中部を形成している。



第2図 採集位置  
(国土地理院DEMより作成)

## 3. 採集遺物の概要

### (1) 採集場所

本稿で取り扱う資料は、石器が出土した地点から北西側へ約150mほど離れた谷部へと向かう斜面地

の地表面で採集したものである。採集地点は、近現代の畑作にともない地形が改変されている。

## (2)採集遺物

採集資料は2点で、肉眼観察から、それぞれ玉髓・鉄石英であると判断した。これらの石材は、採集地点の近傍の河川で確認できず、石材を産出する岩体を想定することは出来ない。また、本資料を採集した段丘上に礫を供給する河川がないことから自然の営力によってもたらされた可能性は極めて低いことが指摘でき、後期旧石器時代から古代のいずれかの段階において、人為的に持ち込まれたものであると考えられる。

## (3)玉髓製石核

最大長は6.2cm、最大幅は7.3cm、最大厚は8.2cm、重量は20.5gである。本資料は自然面を多く残し、自然面の摩耗度から、亜角礫～亜円礫を素材としている。資料は自然面と剥離痕で構成されている。刃部などの機能部と判断しうる連続的な剥離が認められず、石核であると判断した。また、摩滅の弱い剥離痕と摩滅が強い剥離痕があり、摩滅が強い剥離痕は、自然面と同程度に摩滅している。このことから、摩滅の強い剥離痕については、自然の営力によって破碎した痕跡と考えられる。一方、摩滅の弱い剥離痕は、稜線が鋭く、自然面と明瞭に区別でき、自然堆積時に発生したものではないと判断できる。また、摩滅の弱い剥離痕は、一定の規範が読み取れることから、以下にその順序や性格について記載する。

剥離痕は1・5→3の順に先後の切り合い関係を持っている。1にみられる剥離痕は1枚のみで、リングは大きく発達し、部分的に階段状剥離を呈する。剥離の末端は薄く、一見すると、複数の小さな剥離痕が観察できるが、階段状剥離の端部から同一方向に剥離が発生し、稜線はごく曖昧になっている。これらは、1の剥離が、原礫の性状に従って進行し、末端の剥離の角度が原礫に近い状態であったため、偶発的に生じたと推測できる。また、1の剥離痕は、打点のあるべき箇所を3の剥離によって失われていることから、3の剥離をおこなうため、平滑な打面を作出することを目的とした剥離であると解釈できる。

3にみられる剥離痕は3つで、上下の2方向から発生している。①の剥離末端は蝶番状剥離を示し、②と③の末端は階段状剥離を示している。打点はいずれもツブれていることから、複数の打撃が想定できる。3にみられる剥離痕の末端形状は、対向する打撃により形成されたことが推測できる。これらの特徴から、敲石と台石で挟み込むようにして打撃を加える剥片剥離技術である、両極打法がもちいられていることが読み取れる。5の剥離痕は1・3から独立しているが、3と同様に対向する剥離痕が確認でき、打点がツブれていることから、両極打法が本資料において積極的に用いられていることがわかる。

#### (4)鉄石英チャンク

最大長は2.5cm、最大幅は2.2cm、最大厚は1.5cm、重量は5.6gである。主要剥離面にあたる1の観察から、横長傾向の剥片もしくは碎片であると推察できる。自然面あるいは節理面が一部残存している。資料にみられる剥離面の摩滅は、肉眼観察下ではすべて同様であり、二重風化は認められない。打点および末端、周縁が折損し、主要剥離面には、周縁部より加えられた水平剥離がみられる。積極的に折損や水平剥離を評価するならば、台形石器の製作を意図した可能性が指摘できる。

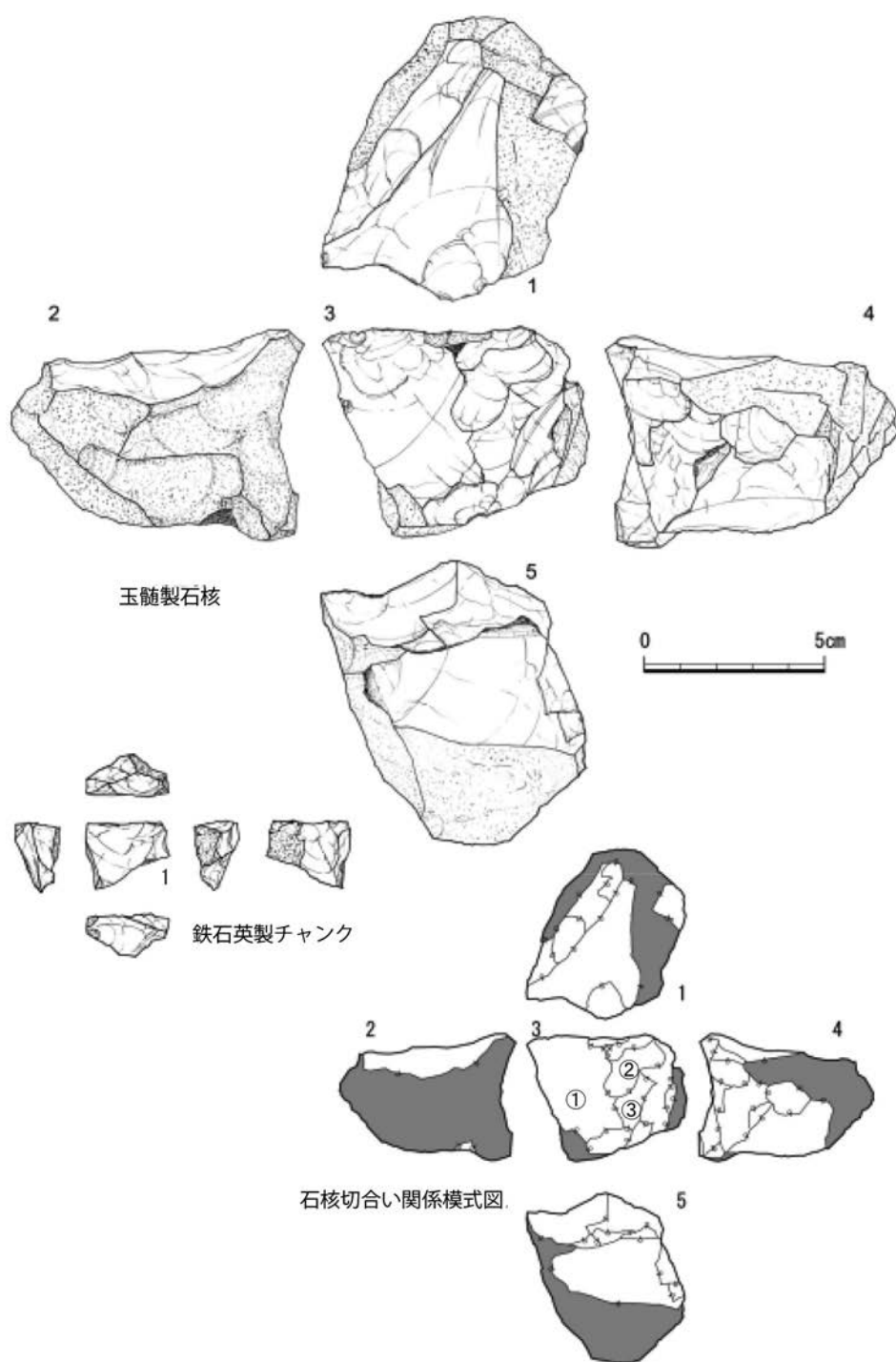
### 3 おわりに

今回の資料の観察で、剥離痕が一定の規則性をもち、明確な意図をもって剥離していることを確認した。本稿で取り扱った資料は、表面採集であるため、明確に年代を絞り込むことは極めて困難である。例えば、玉髓製石核で観察できた両極打法は、旧石器時代以来、石を加工する際に普遍的にもちいられる技術である。この技術をもって年代を推定することは困難である。鉄石英チャンクについては、折損部や水平剥離を積極的に評価すれば、後期旧石器時代にみられる台形石器と評価することもできる。しかし、折損は通常の剥離でも偶発的に発生することから、積極的な評価はやはり困難である。資料に使用されている玉髓や鉄石英といった石材も、採集地点である丹後地域の縄文時代や弥生時代の石器や古代の玉作りに用いられているため、年代の絞り込みの指標足りえない。しかしながら、本資料は、京丹後市上野遺跡の発掘調査地点よりやや離れた、谷部付近で採集できたことから、遺跡は段丘面上に広く展開する可能性が指摘することができる。

(おもて・まさみち＝当調査研究センター調査課主任)

#### 参考文献

- 面将道 2018「平成 29 年度発掘調査略報 7. 上野遺跡」『京都府埋蔵文化財情報』第 134 号（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 面将道・加藤雄太 2019「平成 30 年度発掘調査略報 2. 上野遺跡第 2 次・平遺跡第 4 次」『京都府埋蔵文化財情報』第 135 号（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 面将道 2020「令和元年度発掘調査略報 5. 上野遺跡第 3 次」『京都府埋蔵文化財情報』第 137 号（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 竹岡俊樹 1987『石器研究法』言叢社
- 旧石器文化談話会 2021『旧石器考古学辞典』（四訂版）雄山閣



第3図 石器実測図・切り合い図